

判例研究

# Twitter に投稿された画像の 同一性保持権侵害等が認められた事例 ——Twitter リツイート事件控訴審

(知財高判平成30年 4 月25日裁判所 HP (平成28年 (ネ) 第10101号))

谷 川 和 幸\*

## 1 はじめに

### (1) 本判決の衝撃

本件は、原告が撮影し著作権を有する写真が無断で Twitter に投稿されたことから、当該投稿を行ったアカウント及び当該投稿をリツイート（その意味は後に詳述する。）したアカウントの保有者らの発信者情報について、特定電気通信役務提供者の損害賠償責任の制限及び発信者情報の開示に関する法律（以下「プロバイダ責任制限法」という。）4 条 1 項に基づき、Twitter を運営する法人に対して開示請求がなされた事案である。

前者のアカウントによる写真の無断投稿行為が公衆送信権侵害（送信可能化）となることは当事者間に争いがなく、中心的な争点は後者のアカウントが行ったリツイート行為によって原告の「権利が侵害されたことが明らかである」かどうか（同項 1 号）であった。原告が侵害を主張した権利は、著作

---

\*福岡大学法学部講師

権（複製権、公衆送信権、公衆伝達権）及び著作人格権（氏名表示権、同一性保持権、113条6項の名誉声望）であるが、原審はこれらすべての権利について侵害の成立を否定し、リツイート者に関する発信者情報開示請求を棄却した<sup>1</sup>。原判決において最も詳細に検討がなされたのは公衆送信権侵害の成否の点であった。そこでは、リツイート者は無断投稿された画像ファイルのURLへのインラインリンクを設定したにとどまり、このようなリンクは画像データの送信行為には当たらないから公衆送信権の侵害ではないとの判断がなされた。これはロケットニュース24事件大阪地裁判決<sup>2</sup>に引き続き、インラインリンク（埋め込み表示）の送信行為該当性を否定したものであり、各評釈も原判決をそのように位置付けて検討している。

控訴審においても同じ点が議論され、同様の判断がなされている。その内容はこれまでの学説や裁判例の傾向に沿うものであり、高裁レベルとしては初めてのものであるということと幫助の成立を否定したこと<sup>3</sup>を除けば、特に目新しい内容を含むものではない<sup>4</sup>。筆者自身、リンクングに関しては本

---

<sup>1</sup> 東京地判平成28年9月15日裁判所 HP（平成27年（ワ）第17928号）。評釈として、小泉直樹「判批」ジュリスト1503号（2017年）8頁、桶田大介「判批」『民事判例』14号（日本評論社、2017年）126頁、青木大也「判批」ジュリスト1520号（2018年）122頁、福市航介「判批」著作権研究44号（2018年）140頁がある。

<sup>2</sup> 大阪地判平成25年6月20日判時2218号112頁。

<sup>3</sup> 本件の原告写真家は本件以外にも写真の無断利用について発信者情報開示請求訴訟を提起しているところ、本判決とは異なり、インラインリンクによる公衆送信権侵害の幫助の成立を肯定して発信者情報開示請求を認めた事例として、札幌地判平成30年6月1日（平成28年（ワ）第2097号）D1-law 28262901等が存在しており、今後の研究が待たれるところである。

<sup>4</sup> あえて言うならば、公衆送信の主体の判断において、原判決はまねきTV事件最高裁判決（最判平成23年1月18日民集65巻1号121頁）だけを引用していたのに対し、本判決はこれに加えてロクラクII事件最高裁判決（最判平成23年1月20日民集65巻1号399頁）をも引用している点は注目されよう。この場面で両判決がどのような関係に立つのかははまだ明らかにされていとは言えないが、前者は規範的主体ではなく物理的主体の認定をしたものと理解する見解として、孫友容「自動公衆送信の日中比較研究：WIPO条約からの軌跡」（博士論文、2018年）<<http://hdl.handle.net/2115/69378>>89頁以下（特に107頁以下）を参照。

誌前号掲載の別稿<sup>5</sup>で扱ったばかりであり、本判決が上記のような内容にとどまっていたのであれば、改めてこのような評釈を公表することはなかったであろう。

しかし本判決の内容はこれにとどまるものではなかった。本判決はリツイート者による著作権侵害を否定した一方で、著作者人格権（氏名表示権、同一性保持権）の侵害を肯定し、発信者情報開示請求を認容したのである。その理由は後に詳細に分析することになるが、簡単に言えば次のようなことである。Twitter に投稿された画像がブラウザの画面に表示される場合に、それが第一次的な投稿であれ、その後に行われるリツイートであれ、いずれの場合にも、投稿時のオリジナルのサイズでそのまま表示されるのではなく、縮小され、また画像の一部のみを切り出して表示される（このことを判決文中ではトリミングと呼んでいる。）。裁判所はこの点に同一性保持権侵害を見出したのである。同時に、オリジナルの写真の下部に付されていた氏名表示がトリミングの結果として欠落した状態で表示される点が氏名表示権の侵害とされた（後掲の《図1》と《図16》を対比せよ。）。

なるほど、これだけを見ると、十分ありうる判断である。原告写真家が撮影した写真が一部のみを切り取られ、さらに氏名表示が欠落した状態で表示されるのであれば、それが著作者人格権侵害とされるのは当然のように思える。ところがこのような評価は Twitter の実態から大きく乖離したものである。というのは、上記改変は利用者の一切関知しないところで、Twitter の仕様上、自動的・機械的に行われるものだからである。利用者側にはこの改変を回避する手段はない。望むと望まないとにかかわらず、Twitter を利用して画像を投稿し、または画像付き投稿をリツイートする場合には、常に、

---

<sup>5</sup> 谷川和幸「権利者の許諾を得ずにアップロードされているソフトウェアのダウンロード先 URL を教示する行為が公衆送信権の侵害に当たるとされた事例」福岡大学法学論叢63巻1号（2018年）201頁。

機械的な上記改変を伴った状態で表示が行われてしまうのである。リツイート者の立場から述べるならば、他人が投稿した画像付き投稿をリツイートしただけで、それが結果的に改変状態で表示されてしまうがゆえに、自身の発信者情報が容易に開示されてしまう、というのが本判決の帰結である。

このような帰結は Twitter 利用者に衝撃を与えるものであった<sup>6</sup>。あるニュースメディアは「『RT で画像自動トリミング、著作者人格権侵害に当たる』 知財高裁判決、Twitter ユーザーに衝撃」という見出しで本判決を報じた<sup>7</sup>。画像付き投稿のリツイートは多くの利用者が日常的に行う行為であるのに、その中に当初の投稿が無断投稿であるものが紛れていれば<sup>8</sup>、自身の発信者情報が容易に開示され、著作者からの訴訟の危険を負うことになるからである。当初の投稿が無断投稿であるかどうかは、通常、投稿それ自体からは判断が困難であるところ、上記の危険を回避するためにはリツイートを控えるしか方法がない。これはきわめて萎縮効果の生じる状況である。

筆者は、本判決がもたらすこのような帰結は不当なものであり、この不当な判断は、①「改変」の解釈（著作権法20条1項）、②「やむを得ないと認められる改変」に当たらないとした点（同条2項4号）、③リツイート者を侵害情報の発信者だとした点（プロバイダ責任制限法4条1項柱書き）の誤りによってもたらされたものだと考えている。そしてこのような不当な判断

<sup>6</sup> 判決公表後の Twitter 利用者の反応を筆者がまとめた<<https://togetter.com/li/1236554>> 及びそのコメント欄に加え、<<http://ceron.jp/url/togetter.com/li/1236554>>、<<http://ceron.jp/url/www.itmedia.co.jp/news/articles/1806/13/news109.html>>、<<http://b.hatena.ne.jp/entry/s/togetter.com/li/1236554>>、<<http://b.hatena.ne.jp/entry/www.itmedia.co.jp/news/articles/1806/13/news109.html>>、<<https://it.srad.jp/story/18/06/14/0920244/>>、<<https://newspicks.com/news/3097747/>>等に集約されたコメントを参照。

<sup>7</sup> <<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1806/13/news109.html>>（ITmedia、2018年6月13日）。なお見出し中の「RT」とは「リツイート」のこと。

<sup>8</sup> 著作者自身が自己のアカウントに適法に投稿した画像を第三者がリツイートした場合にも同様の自動的・機械的な改変は生じるが、この場合には著作者が同意している Twitter の利用規約（改変を許容するという内容のもの。）により侵害とはならないと考えられる。

に至った理由は、重要な事実を主張していない被告 Twitter 社の応訴態度にあったものと見ています。これは、発信者とプロバイダとの間に利害対立がある場面において発信者の手続保障が十分になされていないプロバイダ責任制限法の欠陥が顕在化したものである。

## （２）本稿の目的及び本稿に掲載した写真について

そこで以下では、もっぱら同一性保持権侵害の点に絞って、Twitter の具体的な仕組みを確認しながら、本判決の判断内容を検討したい。その際、Twitter を利用していない読者や、Twitter がサービスを終了した後に本判決に触れることになる将来の読者に向けて、具体的な画面の写真入りで説明を行う<sup>9</sup>。

ところで本件で原告が撮影した本件写真は、「ホワイトとピンクのスズラン」と題する植物の写真であり、その実物は原告ブログにおいて紹介されている<sup>10</sup>。本稿でも実際の本件写真を用いて Twitter の仕組み等の説明を行うことも検討したが、本件写真の具体的な内容が本判決の結論を左右したわけではないと考えられること、Twitter の仕組み等の説明のためには別の写真でも代用可能であること、トリミング状態の画面写真を掲載することには同一性保持権侵害の懸念があることなどを考慮して、筆者が独自に撮影した全く別の写真を本件写真の代わりに用いることとした。

本稿において本件写真の代替として用いる写真は次のものである。本件写真と同様、画像の左下に著作者名が書き込まれている<sup>11</sup>。もっとも、サイズについては実際の本件写真よりも意図的に縦長にしている（その理由については後注33を参照。）。

---

<sup>9</sup> なお写真は印刷版では白黒で印刷されているが、レボジトリ収録のウェブ版ではカラーで表示されている。

<sup>10</sup> <<http://ynawata.asablo.jp/blog/2018/05/22/8854401>>。

<sup>11</sup> 実際の本件写真には左下の著作者名に加え、右下に原告のサインが、左上に「転載厳禁」の文字がそれぞれ書き込まれているが、これらの再現は省略した。

《図1》本稿において「本件写真」の代替とする画像（筆者撮影）



また、当該投稿を行った「本件アカウント2」及びリツイートを行った「本件アカウント3」も、それぞれ代用のアカウントを Twitter に作成し、本件で問題となったのと同様の状態を再現してあるので、ブラウザ画面での実際の表示を確認されたい。（アカウント名は @RetweetCase2 及び @RetweetCase3。本稿掲載の図の一部はこれらの画面のスクリーンショットである。）。

### （3）基準時について

本件を評釈するうえで留意する必要があるのが基準時の問題である。すなわち Twitter のサービス内容や仕様は頻繁に変更されるため、本件で問題となった行為の時点と現時点とで、具体的な表示内容が異なっている可能性がある。実際、トリミングの仕様は後述のように2015年に変更されており、本件で問題となった投稿が行われた2014年当時と現在とではトリミングの表示のされ方に違いがある。

不法行為に基づく損害賠償請求を行うための前提として行われる発信者情報開示請求における権利侵害の判断基準時は不法行為時だと解されるから<sup>12</sup>、判例評釈という観点からは、本件で不法行為（と主張されている投稿及びリツイート行為）が行われた2014年当時の表示状態を前提とすべきであろう。他方、本判決が今後の Twitter 利用者にどのような影響をもたらすかを分析するには、現在の表示状態に基づいた検討が必要となる。そこで本稿では必要に応じて両者を使い分けることとし、その際にはどちらの時点の表示について述べているのかを明確にするように努めた。なお、「現在」とは、本稿執筆時点、すなわち2018年6月30日を指している（脚注で引用した URL の最終閲覧も同日である。）。

前置きが長くなったが、それでは本件の事案の概要の説明に移ろう。その際、本件ではアカウント1ないし3についてそれぞれ異なる機能が関わっているため、それぞれについて機能の説明→当該アカウントに関する事案の概要の順に区切った構成で叙述を行う。

## 2 事案の概要

### （1）Twitter の説明その1（プロフィール画像設定について）

Y<sub>2</sub>（被告・被控訴人。ツイッター、インク。判決文中の呼び名は「被告米国ツイッター社」）は、「Twitter（ツイッター）」という名称のインターネットサービス<sup>13</sup>を運営する米国法人である。Twitter は「ミニブログ」や「短文投稿サイト」などとも呼ばれるソーシャルネットワーキングサービスの一種であり、2006年にサービスが開始され、2009年ごろから日本でも広く知ら

---

<sup>12</sup> 事実審口頭弁論終結時と解すると、侵害情報の削除が行われた場合には開示請求が認められないこととなり、法の趣旨に反することになる。

<sup>13</sup> <<https://twitter.com>>.

れるようになった<sup>14</sup>。Y<sub>1</sub>（被告・被控訴人。Twitter Japan 株式会社。判決文中の呼び名は「被告ツイッタージャパン」）は Y<sub>2</sub>の日本における子会社であり、日本において Twitter の広告、サポート等を行うため2011年に設立された。2017年10月現在の日本の月間利用者数は4500万を超えている<sup>15</sup>。

Twitter の利用を希望する者は、メールアドレスまたは携帯電話番号を入力し、アカウント名とパスワードを設定することで、無料の会員登録を行い、アカウントを取得することができる。アカウントを取得した利用者は、「ツイート」「リツイート」「フォロー」等の機能を利用することができるが、その内容の説明は順次行うこととして、ここではまずプロフィール画像の設定の説明から行う。後述の通り、各ツイートには投稿者のプロフィール画像が表示されることとなり、この画像が投稿者を視覚的に特定する重要な要素となる（複数の投稿者のツイートが表示されたタイムラインの例として《図20》参照。）。

《図 2》プロフィール画像設定画面へ（2018年現在の画面）



ここで「画像をアップロード」をクリックすると、手元の端末内の画像ファイルを選択する画面になる。

<sup>14</sup> Twitter の流行を受け、2010年4月には、Twitter を通じて知り合った男女を描くドラマ「素直になれなくて」（脚本：北川悦吏子）が放送され、初の「ツイッタードラマ」として話題を呼んだ。また2011年3月11日の東日本大震災の際には、情報の拡散のための重要なインフラとして利用された。

<sup>15</sup> <<https://twitter.com/TwitterJP/status/923671036758958080>>.



《図 3》トリミング範囲を指定する画面（2018年現在の画面）



プロフィール画像は円形で表示されることになる（2018年現在の仕様）。そこで、選択した画像のどの範囲を円形にトリミングするかを利用者が決定することになる。写真下部のスライダーを左右に動かすと背景画像が縮小・拡大される。また画像部分をドラッグすると背景画像の場所が移動する。このようにして、任意の部分を円形にトリミングするように指定することができる。

《図 4》プロフィール画像が設定された（2018年現在の画面）



《図 3》の画面で「適用」ボタンを押すことで、利用者が指定した範囲が円形にトリミングされたプロフィール画像が設定された。なおこのプロフィール画像はサーバ上には正方形の画像として保存されている<sup>16</sup>。ブラウ

ザ画面での描画（表示）の際にCSSを適用することで、表示上、トリミングされているという点で、後で触れるツイート内に添付された画像と同様である。このCSSの説明はすぐ後に行う。

ところで本件で問題となった行為が行われた2014年当時、プロフィール画像は正方形で表示されており、円形にはトリミングされていなかった<sup>17</sup>。当時のプロフィール画像設定画面を知るために、当時流通していたTwitterの代表的な解説書から該当箇所を引用する<sup>18</sup>。

《図5》トリミング範囲を指定する画面（2014年当時の画面）



ここから分かるように、《図3》における円形が正方形でただけで、ス

<sup>16</sup> <[https://pbs.twimg.com/profile\\_images/1008196285789188097/1Cfqt\\_K7.jpg](https://pbs.twimg.com/profile_images/1008196285789188097/1Cfqt_K7.jpg)>のほかに、いくつかの異なるサイズの画像（すべて正方形）が同時に保存される。本文中にのちほど登場する、URLの後半部分に「\_bigger」の付いた画像もこのうちの一つである。本件当時の各画像のサイズについては後注22を参照。

<sup>17</sup> 円形にトリミングするCSSが適用されるようになったのは2017年6月のTwitterの仕様変更以降である。この件に関するTwitter社幹部へのインタビューとして、<<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1707/18/news026.html>>を参照。

<sup>18</sup> リンクアップ『今すぐ使えるかんたん Twitter ツイッター入門[最新版]』（技術評論社、2015年12月）63頁より引用。

ライダーにより拡大・縮小を行い、ドラッグにより場所を選ぶという挙動自体は異なるところはなかったようである。

つまり、円形への仕様変更の前後を問わず、画像のどの部分をどのように切り出してプロフィール画像として設定するかについては、利用者が決定することとされている。この点が後に説明するツイート内の画像添付のトリミングとの決定的な違いであるので注意が必要である。

## （２）HTML と CSS

次に、本判決にも登場する HTML と CSS の技術について、本件の理解に必要な限度で説明を行う。HTML (Hyper Text Markup Language) とはウェブページを作成するために用いられる基本的なマークアップ言語である<sup>19</sup>。HTML は、<a>、<img>、<div>等のタグの組み合わせにより記載される<sup>20</sup>。例えばウェブページ中に特定の画像を表示させる場合には<img>タグを用いて次のように記載する。

```

```

これにより、指定された URL から画像ファイルが読み込まれ、ブラウザ上に表示されることになる<sup>21</sup>。

---

<sup>19</sup> ウェブブラウザで任意のページを閲覧中に「ソースを表示」等の機能を利用することで、当該ページを表示させている HTML のソースコードを見ることができる。

<sup>20</sup> したがってその組み合わせの記載方法に創作性があれば、特定の HTML ファイルが著作物として保護されることは理論的にはあり得る。もっとも現実にはかなり表現の選択の幅が狭く、アイデアとマージした表現とされることが多かろう。創作性が否定された事例として、知財高判平成29年3月14日裁判所 HP（平成28年（ネ）第10102号）。

<sup>21</sup> このように HTML 自体には画像ファイルの内容そのものは保存されておらず、ブラウザが HTML を解読して画面表示を行う際に、機械的に、当該 URL へのアクセスが行われて画面上にて統合して表示されることとなる。これがいわゆるインラインリンク（埋め込み表示）であ

HTML が文字や画像、リンク等の要素の配置を指定するのに対し、CSS (Cascading StyleSheets) は HTML で配置された各種の要素の装飾 (見た目、表示方法) を指定する言語である。例えば HTML により配置された文字のサイズや色を CSS によって指定することができる。

具体的に、《図 4》において円形に写っているプロフィール画像をブラウザの画面に表示させている HTML 及び CSS を見てみよう。まず HTML ファイルの中に次の一行がある (ただし、本件の説明のために必要のない要素は省略している。以下同じ。)

```

```

画像を表示させる `<img>` タグを用いて、プロフィール画像が保存された URL を指定している。この画像ファイルは正方形であり、この HTML をそのまま表示させると正方形のままで表示される。

《図 6》プロフィール画像のファイルをそのまま表示



これが円形に表示されるのは、そのように指定した CSS が適用されるためである。すなわち、当該 HTML ファイルの冒頭部分では、次の記載によ

---

り、原判決も本判決も、画像の URL を `<img>` タグで指定した HTML ファイルを送信することは画像ファイル (著作物) そのものの送信ではないことを理由に、公衆送信権の侵害を否定したのであった。

り、このページに適用される CSS ファイルがあらかじめ読み込まれている。

```
<link rel="stylesheet"
```

```
href="https://abs.twimg.com/a/1528913591/css/t1/twitter_more_2.bundle.  
css">
```

そして上記の<img>タグの中には、「class="avatar"」という記載があった。これが CSS ファイルで指定された装飾のうち次の部分を適用することを意味している。

```
.Avatar{border-radius:50%}
```

これは「.avatar」で指定された要素については「border-radius:50%」という装飾を適用せよという意味の指定である。border-radius とは四隅の丸まりに関する指定であり、ここでは四隅をすべて50%ずつ丸めよという意味になる。具体的には次のような表示となる。

《図 7》プロフィール画像のファイルに CSS を適用



このように四隅が50%ずつ丸まることにより、全体として円形に表示されるようになった。なお、50%の部分を「10%」、「25%」、「15% / 50%」（水平方向には15%、垂直方向には50%丸めるの意）と指定した CSS を適用するとそれぞれ次のように表示される。

《図 8》 CSS の内容の変化による表示の変化



このように CSS の記載によってブラウザの画面上の表示が異なってくる。元の画像ファイルは正方形のものであるが、それが上書き保存されるということではない。ブラウザの表示の段階でそれとは異なる表示のさせ方が可能だということである。読み込んでいる画像ファイル自体は同一であるから、いずれの表示かを問わず、ブラウザの「名前を付けて画像を保存」機能で保存されるのは元の正方形の画像ファイルである。

以上の内容をまとめると次のようになる。まず利用者がプロフィール画像を設定する際に元の画像の拡大・縮小・切り出す場所を設定する（トリミング①）。その段階で、設定内容に応じた正方形の画像ファイルが作成され、サーバに保存される。Twitter の各種ページにおいてプロフィール画像が参照される際には、正方形の画像ファイルが呼び出されつつも、それを表示する際の CSS の働きによって円形に装飾される。その結果、ブラウザの画面上には円形にトリミングされた画像が表示されることになる（トリミング②）。

この一連の流れの中で 2 回のトリミングが行われていることに注意する必要がある。トリミング①はアップロード段階で利用者が主体的に設定してファイルに保存する不可逆的なもの、トリミング②は表示段階で CSS の働きによって機械的に行われる表示上のものである。

### （３）事案の概要その１（本件アカウント１関係）

ここまでの説明を終えたことで、ようやく本件の事案の概要に進むことができる。

X（原告・控訴人）は職業写真家であり、写真の著作物である本件写真を撮影し、その著作権を有している。Xは自己のウェブサイトにおいて、2009年6月、本件写真を公開した。本件写真には「転載禁止」の文字のほか、Xの氏名等が記載されている（前注11）。

本件アカウント１の保有者（氏名不詳者。以下この者を「本件プロフィール画像設定者」と呼ぶ。）は、遅くとも2015年1月21日までは、Xに無断で、本件写真をプロフィール画像として設定した（本件プロフィール画像設定行為）。これによりサーバ上に本件写真の画像（トリミング①を経た正方形のもの）が保存されることとなった。前注16の通り、サイズの異なる複数の画像ファイルが同時に保存されるが、これらが流通情報１（１）～（４）と呼ばれている。

本件プロフィール画像設定者が何らかのツイートを行うと、当該ツイートにはプロフィール画像が自動的に表示されることになる（《図12》の左上を参照）。そのため、ツイート履歴を一覧表示したタイムライン（《図11》を参照）における各ツイートにも（流通情報１（５））、その中の特定のツイートにも（2015年1月21日に投稿された特定のツイートが流通情報１（６）、同年2月11日の特定のツイートが流通情報１（７）とされている。）本件写真が表示される。

なお本件の行為の時点において、円形にトリミングするというTwitterの仕様はまだ導入されていなかったから、CSSによる機械的なトリミング表示（トリミング②）は存在しておらず、あくまでも本件プロフィール画像設定者が主体的に行ったトリミング①によって正方形に整形された画像につき、様々なサイズで表示がされていることが問題となりうるに過ぎない<sup>22</sup>（プロ

フィール画像が正方形で表示されていた当時の画面として、《図14》、《図15》及び《図17》を参照。)

Xは流通情報1(1)～(7)によってXの著作権(複製権、公衆送信権、公衆伝達権)又は著作者人格権(氏名表示権、同一性保持権、113条6項の名誉声望)が侵害されたことが明らかであると主張して、プロバイダ責任制限法4条1項に基づき、Yらに対し、本件プロフィール画像設定者に関する発信者情報の開示を請求した。

本件プロフィール画像設定者がXに無断で著作物である本件写真をプロフィール画像として設定しサーバにアップロードしている以上、その送信可能化(すなわち流通情報1(1)～(4))及び本件アカウント1のタイムラインへの表示(流通情報1(5))がXの公衆送信権の侵害にあたることについては当事者間に争いはない。争点は個別ツイートへの本件写真の表示(すなわち流通情報1(6)及び(7))がXの著作権又は著作者人格権の侵害となるかである。

---

<sup>22</sup> 実際、本件写真のオリジナルサイズは475×453ピクセルであり、完全な正方形ではないから、トリミング①において正方形に整形された際に左右がごくわずかに切り取られている。また流通情報1(1)～(4)の画像は順に400×400、128×128、73×73、48×48ピクセルというサイズであり、サイズが小さくなればなるほど本件写真に記載されていた氏名表示が縮小されて見えなくなってしまう。Xはこれらの点を捉えて同一性保持権及び氏名表示権侵害の主張をしていたが(訴状6頁)、争点がリツイート者らの行為へと次第にフォーカスしていった結果、本判決及び原判決に記載された主張整理ではこの主張が取り上げられることはなかった。本判決は「流通情報1(6)及び(7)については、流通情報1(3)の画像と同じものが表示されているから、著作者人格権の侵害があると認めることはできない」と判示するが(39頁)、流通情報1(3)の画像自体がオリジナルの本件写真と比べて改変されている点を見落としたものである。そしてこの改変(トリミング①)については、《図3》及び《図5》のような設定画面を利用者自身が操作して表示内容を決定するという意味で、本件プロフィール画像設定者による主体的な改変行為と見ることは比較的容易である(もっともプロバイダ責任制限法4条1項1号の「流通によって」要件の充足は別途問題となりうる。)



行為者	行為	本稿における対応する図
本件アカウント1 (本件プロフィール 画像設定者)	本件プロフィール画像設定行為 ＝正方形画像がサーバに保存 →タイムライン及び個別ツイ ートに表示	図3、5 図6（＝流通情報1(1)～(4)） 図11、12（＝流通情報1(5)(6)(7)）

#### （４）Twitterの説明その２（ツイートと画像添付について）

本件アカウント1の説明が終わったので、次は本件アカウント2である。ここではツイート行為が問題となっているので、その説明から始めよう。

アカウントを取得した利用者が行える行為は、大別すると、情報の発信と受信に分かれる。発信に関しては、通常の「ツイート」と、その「リツイート」の２種類のものがある。ここではまず「ツイート」とそこに写真を添付する方法について説明する。

Twitterの最も基本的な機能は全角140文字（半角280文字）以内で、自由に文字列を書き込んで投稿できるというものであり、その個別の投稿のことを「ツイート（Tweet）」と呼んでいる。

#### 《図9》ツイートの内容を書き込む画面（2018年現在の画面）



上記画面内で薄い文字で「いまどうしてる？」と書かれた領域に文字を打ち込むことができる。なおその左側に円形で表示されているのがプロフィール画像である<sup>23</sup>。

<sup>23</sup> 本稿では便宜上、本件アカウント2のプロフィール画像を用いてさきほどのプロフィール画像設定行為の説明を行ったが、実際には本件アカウント1と2は別のアカウントである。

文字を打ち込む領域の下に4つのアイコンが並んでいるが、その左端のアイコンを押すとツイートに画像を最大4枚まで添付することができる。ここでは本件写真を含む3枚の写真を添付しつつ、その感想を書き込んで投稿することとしよう。その投稿画面が次の《図10》である<sup>24</sup>。

《図10》ツイートに画像を添付しているところ（2018年現在の画面）



実はこの画面において既にトリミング表示が行われているが、それはさておき、右下の「ツイート」ボタンを押すことにしよう。これを押すことによって、この内容（文章および3枚の画像）が投稿され、Twitterのサーバに記録されることになる（著作権法2条1項9号の5イの送信可能化に該当する<sup>25</sup>）。

<sup>24</sup> 《図10》では3枚の画像が左右に並んでいるが、これは添付の操作をした順番に左から並んだものである。そして《図11》及び《図12》では、1番に添付の操作をした画像が左側に、2番が右上に、3番が右下に表示される。なお本件で問題となった実際のツイート（流通情報2(1)）では、本件写真は3番目に添付されて右下に表示されている（1番がディズニーキャラクター、2番がサンリオキャラクター）。ちょうど《図15》の左側（BEFORE）の画像の右下部分と位置もサイズも同じである。

<sup>25</sup> もっとも、アカウントを非公開にすることも可能であるため、受け手が「公衆」とは言えず厳密には「自動公衆送信」「送信可能化」には当たらない場合もある。なお非公開アカウント

あるアカウントが投稿したツイートの一覧は、各アカウントの「タイムライン」というページで時系列順に表示される。《図10》で投稿したツイートを、その前後のツイートとともにタイムラインに表示させた画面が次の《図11》である。

《図11》アカウントのタイムライン<sup>26</sup>（2018年現在の画面）

ツイート ツイートと返信 メディア



ここでは、「RetweetCase2」<sup>27</sup>という名前のアカウントが投稿したツイー

のツイートをリツイートすることはできない。これに対しプロフィール画像についてはアカウントの公開・非公開を問わず公衆に向けて表示される。

<sup>26</sup> <<https://twitter.com/RetweetCase2>>.

トが、下から上に時系列順に3つ表示されている。なお「本件アカウント2」という部分はプロフィールのうち氏名等を入力するための欄に利用者が書き込む名前であり、本名を記入する利用者もいる。また「36分」「7分」「1分」というのは、タイムライン画面を表示させた時点から遡って、当該ツイートが何分前に投稿されたかを示している（その後時間が経つと「1時間」「10時間」等となり、さらに以前のツイートについては投稿日が表示される。）。

このようにタイムラインにはそのアカウントが投稿した多数のツイートが並ぶことになるが、そのうちのあるツイートの部分をクリックすることで、その特定のツイートだけを画面の中心に表示させることができる。

《図12》特定のツイートだけを表示<sup>28</sup>（2018年現在の画面）



<sup>28</sup> 画像内ではその前に「@」マークがついているが、これはアカウント名であることを示すために自動的に表示されるものである。

さて、《図1》に示した本件写真の全体像と、その画像ファイルを Twitter に投稿した結果の表示画面である《図11》及び《図12》を見比べてみると、一見して明らかにとおり、画像の上下が切り取られている。これが本件で問題となったトリミング表示である。また、トリミングされた結果、本件写真の下部に記載されていた著作者名が表示されなくなっている。

ここで注意が必要な事実が次の2点である。

第1に、《図10》の画像投稿画面において、投稿者がこのようなトリミングを自覚的・主体的に指定したわけではないことである。すなわち、投稿者は自らが投稿した画像のどの部分を切り出すかの範囲指定をする機会を与えられていないどころか、そもそもトリミング表示にするかどうかの決定権すら有しない。この点で、プロフィール画像設定画面（《図3》及び《図5》）において設定者が主体的にトリミング①を行ったこととは異なっている。こちらの表示上のトリミングは HTML 及び CSS に基づいて機械的に表示された結果（トリミング②）である。

第2に、送信可能化された画像自体はトリミングされていない完全なものである（プロフィール画像とは異なり正方形への整形も行われない。）。このことは、《図11》や《図12》における画像部分をブラウザ上でクリックすることにより明らかになる。画像をクリックした画面が次の《図13》である。

---

<sup>28</sup> <<https://twitter.com/RetweetCase2/status/1007924573172428800>>.

《図13》トリミング表示されている画像部分をクリックした画面 (2018年現在の画面)



お分かりいただけたでしょうか。《図11》及び《図12》の画面表示はあくまでもサムネイル（縮小され、トリミング表示されたもの。）に過ぎず、その画像部分をクリックすることで、本来の画像の全体を表示することができるのである（《図13》）。

実際、《図12》でも《図13》でも、インラインリンク（埋め込み表示）が張られている画像ファイルの URL はどちらも同じである<sup>29</sup>。同じ画像ファイルを呼び出しながら、《図13》ではそれをそのまま表示し、《図12》では CSS を適用することで、ブラウザ画面における描画の際にトリミング表示（マスキングやクロップとも呼ばれる。）が行われているという違いがある。

<sup>29</sup> <<https://pbs.twimg.com/media/Dfzdg-tUcAA4Qz7.jpg>>.

要するに、利用者は、トリミングした状態で画像をアップロードしたわけではない（トリミング①の不存在）。画像自体は改変される前の状態でアップロードされており、それが、描画の際に CSS の適用を受けて初めてトリミング表示されることになるのである（トリミング②）。この点がプロフィール画像の場合と異なっている。

以上はいずれも2018年現在の仕様にに基づく画面表示の説明である。それでは本件で問題となった投稿が行われた2014年12月当時にはどのような表示が行われていたのだろうか。ここで、冒頭で触れた2015年12月7日の仕様変更が意味を持ってくる。そこでまずこの仕様変更に関する Twitter の説明のページに掲載されている対比画像を引用しよう<sup>30</sup>。

#### 《図14》2015年の仕様変更の対比画像 1 ——画像が 1 枚の場合

**BEFORE:**



**AFTER:**



<sup>30</sup> <[https://blog.twitter.com/official/en\\_us/a/2015/a-new-look-for-your-twittercom-photos.html](https://blog.twitter.com/official/en_us/a/2015/a-new-look-for-your-twittercom-photos.html)>より引用。



《図15》2015年の仕様変更の対比画像 2 ——画像が複数枚の場合



《図14》を見れば明らかなように、仕様変更前（左側）は上下が大きくトリミングされているのに対し、仕様変更後（右側）ではトリミングが行われなくなったようである。また《図15》は複数枚画像を投稿した場合の表示であるが、仕様変更後（右側）がちょうど《図12》と同様に、1枚を強調し、その他を右側に縮小していずれも正方形に配置しているのに対し、仕様変更前（左側）では4枚の画像が均等のサイズでいずれも長方形にトリミング表示されている。

これを基に作成した、本件写真の2014年当時のトリミング表示の想像図が次の《図16》である。原告ブログでは縦475ピクセル×横453ピクセルの写真が、縦226ピクセル×横453ピクセルで表示されたと記載されているので<sup>31</sup>、おおむねその比率で切り出してみた。

<sup>31</sup> 前注10。



《図16》本件写真のトリミング表示（2014年当時の想像図）



そして2014年当時においても、このトリミング表示部分をクリックすることでトリミング前の画像を表示させることができた。このことを示すために、先ほどと同じ解説書の別の個所を引用する<sup>32</sup>。

《図17》トリミング表示されている画像部分をクリックした画面（2014年当時の画面）



ここでは横長の画像が投稿されているため左右がトリミングされて表示されているが、やはりその表示部分をクリックすることで元の画像が表示される様子が説明されている。

結局のところ、2015年の仕様変更の前後を問わず（《図12》、《図16》及び《図17》）、いずれの場合も本件写真はサムネイル表示画面においてトリミングされ、氏名表示が欠落した状態で表示されることになる<sup>32</sup>。そしてトリミング表示された画像をクリックすることでその全体を表示する画面に遷移する（《図13》及び《図17》）。《図17》の出典元がTwitter 初心者に向けた代表的な解説書であることからすれば、2014年当時、このように全体像を表示させる機能について通常の Twitter 利用者は十分認識していたものと推測される。

さて、このトリミング表示を描画させている HTML 及び CSS の内容の説明に移ろう（2018年現在の仕様）。まず3枚の画像ファイルを<img>タグで呼び出している部分の HTML の記述が次のものである。

```
<div class="AdaptiveMediaOuterContainer">
```

```
<div class="AdaptiveMedia">
```

```
<div class="AdaptiveMedia-container">
```

```
<div class="AdaptiveMedia-triplePhoto">
```

```
<div class="AdaptiveMedia-twoThirdsWidthPhoto">
```

---

<sup>32</sup> 前掲注18・73頁より引用。

<sup>33</sup> もっとも、実際の本件写真はかなり正方形に近いサイズであるところ、仕様変更後の表示ではどの位置の画像も正方形にトリミング表示されるから（《図15》の右側や《図12》参照）、改変の程度は仕様変更前と比較すると軽微だと言えるし、氏名表示部分もきちんと表示されることになる。そこで本稿では本件写真よりも縦長の画像を意図的に用いることで、当時に近い改変状態を再現している。

```
<div class="AdaptiveMedia-photoContainer">  
  34  
</div>  
</div>  
  
<div class="AdaptiveMedia-halfHeightPhotoContainer">  
  
  <div class="AdaptiveMedia-halfHeightPhoto">  
    <div class="AdaptiveMedia-photoContainer">  
      35  
    </div>  
  </div>  
  
  <div class="AdaptiveMedia-halfHeightPhoto">  
    <div class="AdaptiveMedia-photoContainer">  
      36  
    </div>  
  </div>  
  
</div>
```

---

<sup>34</sup> 左側の本件写真。

<sup>35</sup> 右上のワニの写真。

<sup>36</sup> 右下の案内碑の写真。

```
</div>  
</div>  
</div>  
</div>
```

ここでは多数の<div>タグが用いられている。このタグを用いると、<div>とそれに対応する</div>で囲まれた範囲内の要素の描画の際に、各<div>タグの class で指定された装飾が施される。その装飾の具体的な内容を規定するのが CSS ファイルであり、前述のプロフィール画像にかかる CSS ファイルとはまた別のファイルが、HTML ファイルの冒頭で次のように読み込まれている。

```
<link rel="stylesheet" href="https://abs.twimg.com/a/1528913591/css/t1/  
twitter_core.bundle.css">
```

そこで次にこの CSS ファイルの内容を見てみると、上記の class（のうち重要な意味を持つもの）の記載内容は次の通りとなっている。

```
.AdaptiveMedia-triplePhoto  
{font-size:0;height:337.3333333333333 px;width:506px}  
  
.AdaptiveMedia-twoThirdsWidthPhoto  
{display:inline-block;height:100%;margin-right:1px;  
overflow:hidden;position:relative;width:66.66666666666666%}  
  
.AdaptiveMedia-photoContainer img{position:absolute}
```

```
.AdaptiveMedia-halfHeightPhotoContainer{display:inline-block;  
height:100%;vertical-align:top;width:calc(100% / 3 - 1px)}
```

```
.AdaptiveMedia-halfHeightPhoto{height:calc(100% / 2 - 1px/2);  
overflow:hidden;position:relative;width:100%}
```

概略、次のような内容である。まず AdaptiveMedia-triplePhoto において、高さ約337.3ピクセル×幅506ピクセルの長方形の領域が設定される。これが3枚の画像を表示させる領域となる（《図12》の3枚の画像の外周である長方形がこれに当たる。）。次に AdaptiveMedia-twoThirdsWidthPhoto が左側に比較的大きく表示される画像の表示方法を、AdaptiveMedia-halfHeightPhoto 及び AdaptiveMedia-halfHeightPhotoContainer が同様に右側に比較的小さく表示される画像の表示方法を指定している。前者は高さが100%、幅が約66.6%ということで領域の3分の2を占めることになる。後者は高さが約50%、幅が約3分の1ということで領域の3分の1の幅に50%の高さでもって描画されることになる（したがって領域の6分の1を占めることになる。）。このようにして3枚の画像を描画する各領域が決まり、この枠内に<img>タグで呼び出された画像が描画されるわけだが、ここで重要なのが「overflow:hidden」という指定である。これはいま設定された各領域からはみ出す部分については描画しない、という意味である。もしこの設定がなされずに、「overflow:visible」（はみ出した部分を描画するの意）が指定されていれば、《図12》の3枚の画像の描画部分は次の《図18》のようになってしまう（黒枠は AdaptiveMedia-triplePhoto によって設定された長方形の領域を示すために筆者が書き加えた。）。

《図18》領域からはみ出した部分を描画した場合



本件写真のトリミング表示は、描画領域の設定と、そこからはみ出した場合には描画をしないという CSS の「overflow:hidden」設定によって実現されている。これは長方形領域内に綺麗に 3 枚の画像を表示させるために行われるものである。そして、本件写真のうちどの部分をこの領域内に描画するか（そしてどの部分をはみ出ささせて描画しないか）は、HTML ファイルの<img>タグの中の「style="width: 100%; top: -97px;"」の部分によって指定されている。これは呼び出した画像ファイルの表示幅を領域の幅に合わせた上で、描画開始位置を「マイナス97ピクセル」の高さの場所にするという設定である。つまり先ほどの CSS で設定された左 3 分の 2 の領域にそのまま描画するのではなく、そこから上に97ピクセル分だけ高い場所から描画を始めることであり、端的に言えば、本件写真の上から97ピクセル分はあらかじめ領域外にはみ出させて、98ピクセル目からを領域内に描画するという設定である。《図18》において黒枠の上辺が描かれている位置が《図 1》画像の上から97ピクセルにあたる。これをもっと引き上げて、仮に「top: -198px」と指定すると、本件写真がかなり上のほうから描画が始まり、その分はみ出

して非表示となることから、その表示内容は次の《図19》のようになる。

《図19》描画開始位置をもっと上にした場合



《図12》との違いはHTMLによる位置指定のうち「-97px」の部分が「-198px」となっているだけであり、呼び出されている画像ファイル自体は全く同じものである。

以上の説明により、HTML や CSS の記載内容如何によってブラウザ画面上の表示が相当変化することを理解していただけたものと思う。そうなりと残る問題は、これらの HTML や CSS ファイルの内容を作成し、そこでの具体的な数値や設定内容を決定したのが誰か、という点である。

結論を先取りして述べるならば、それは被告 Y<sub>2</sub> こと Twitter 社である。プロフィール画像の設定においては利用者にトリミング①の決定権があったのに対し、ツイートに添付する画像のサムネイル表示の方法(トリミング②)については利用者には何の決定権もない。画像のどの部分を切り出すかは Twitter のプログラムによって機械的に設定が行われるのである<sup>37</sup>。

<sup>37</sup> 2018年現在、AIによってトリミング部分の設定が行われている。「Twitter が AI 技術による画像の自動トリミングの最適化を導入」〈<https://gigazine.net/news/20180126-twitter-ai-auto-cropping/>〉（GIGAZINE、2018年1月26日）参照。

## （５）事案の概要その２（本件アカウント２関係）

さてツイートと画像添付の方法、そしてその画像の表示態様を確認したところで、次に本件アカウント２に関する事案の概要の説明に移ろう。

本件アカウント２の保有者（氏名不詳者。以下この者を「本件投稿者」と呼ぶ。）は、2014年12月14日、Xに無断で、本件写真の画像ファイルを含むツイートを行った（本件写真とディズニーキャラクターの画像とサンリオキャラクターの画像の計３枚の画像を同時に添付した。）。判決文中ではこのツイート行為が「本件ツイート行為２」と呼ばれており、それによって投稿されたツイートが「本件ツイート２」と呼ばれている。《図10》のツイートボタンを押すことで投稿されたツイート（《図11》に表示された３つのツイート中の真ん中のもの、すなわち《図12》のもの。）がこれに当たる。

行為者	行為	本稿における対応する図
本件アカウント２ （本件投稿者）	本件ツイート行為２ ＝本件ツイート２を投稿 ＝流通情報２(2)の送信可能化	図10 図12（＝流通情報２(1)） 図１及び図13の画像

ところで Twitter に投稿された全世界のすべてのツイートにはそれぞれ異なる id が付与される。《図12》のツイートの id は1007924573172428800である。そしてこの id とアカウント名を組み合わせることで特定のツイートを表示させる URL が決定される。すなわちこのツイートの URL は<<https://twitter.com/RetweetCase2/status/1007924573172428800>>である。「流通情報２(1)」と呼ばれる URL がこれに当たる（《図12》）。

またツイートに含まれている各画像にもそれぞれ異なる URL が設定されている。本件写真の URL は<<https://pbs.twimg.com/media/Dfzdg-tUcAA4Qz7.jpg>>である。「流通情報２(2)」と呼ばれる画像ファイルがこれに当たる。この URL をブラウザのアドレス欄に打ち込めば、画像ファイルだけを表示することができる。つまり、本件ツイート行為２によって本件写真の送



信可能化が行われたことになる。

「流通情報 2 (3) 及び (4)」と呼ばれている本件アカウント 2 のタイムラインというのは、《図11》のことである<sup>38</sup>。このように過去のツイート一覧を表示させることで、そこに本件写真がその一部として表示されることになる。そしてそこでは《図11》のように本件写真がトリミング表示されている。

Twitter のサーバにおいて本件写真の画像データが保存されているのは、流通情報 2 (2) の URL だけである。流通情報 2 (1) (すなわち《図12》) や、流通情報 2 (3) 及び (4) (すなわち《図11》) の画面中にも本件写真が表示されているが、これは流通情報 2 (2) の URL から呼び出されて表示されたものである。これがいわゆる画像の埋め込み表示であり、判決文中ではインラインリンクと呼ばれている<sup>39</sup>。

X は流通情報 2 (1)～(4) によって X の著作権 (複製権、公衆送信権、公衆伝達権) 又は著作人権 (氏名表示権、同一性保持権、113 条 6 項の名誉声望) が侵害されたことが明らかであると主張して、プロバイダ責任制限法 4 条 1 項に基づき、Y らに対し、本件投稿者に関する発信者情報の開示を請求した。

本件投稿者が X に無断で著作物である本件写真を投稿している以上、本件ツイート行為 2 及び本件ツイート 2 への表示 (すなわち流通情報 2 (1) 及び (2)) が X の公衆送信権の侵害にあたることについては当事者間に争いはない。争点はタイムラインへの本件写真の表示 (すなわち流通情報 2 (3) 及び

---

<sup>38</sup> 厳密に言えば、流通情報 2 (4) は通常のタイムラインではなく、当該アカウントが過去に投稿したツイートの中で画像等を含むものの一覧を示すページを指している。《図11》の上部右端にある「メディア」をクリックすることで見ることができるページである。

<sup>39</sup> 一審判決は「インラインリンク」を「ユーザーの操作を介することなく、リンク元のウェブページが立ち上がった時に、自動的にリンク先のウェブサイトの画面又はこれを構成するファイルが当該ユーザーの端末に送信されて、リンク先のウェブ 사이트がユーザーの端末上に自動表示されるように設定されたリンクをいう」と説明しており、これは「電子商取引及び情報取引等に関する準則 (平成29年 6 月)」 (<<http://www.meti.go.jp/press/2017/06/20170605001/20170605001.html>>) 142 頁における定義と同じものである

(4) がXの著作権又は著作者人格権の侵害となるかである<sup>40</sup>。

### (6) Twitterの説明その3 (リツイートについて)

本件投稿者については上記のツイート行為が問題となっているが、本件ではさらに、本件投稿者が行った本件ツイート2を「リツイート」した別のアカウントの保有者らに関する発信者情報開示請求も併合されている。そこで次にリツイートの説明に移ろう。

Twitterの機能は情報の発信と受信であると述べたが、受信とは他の利用者が投稿したツイートを閲覧することである。他人の投稿を閲覧する方法にはキーワード検索やハッシュタグなどいくつかのものがあるが、もっとも一般的なのが「フォロー」である。これは、ある利用者のツイートを継続的に受信したいと思った場合にそれを実現する機能である。各アカウントはそれぞれ個別のタイムライン（名前が同じなので紛らわしいが、前述の、自己の投稿履歴という意味でのタイムラインとは異なる概念である。）を有しており、フォローしたアカウントのツイートが、時系列順で次々にタイムライン上に表示されることになる。すなわち、あるアカウントをフォローしておけば、わざわざそのアカウントの投稿履歴画面を見に行かずとも、自身のタイムライン上に自動的にそのツイートが流れてくるようになるのである。例えば新聞社のアカウントをフォローしておくと、最新のニュースに関するツイートが自動的にタイムライン上に表示されるようになる。

「リツイート」というのは、投稿（ツイート）の一種ではあるが、自ら新

---

<sup>40</sup> 既に流通情報2(1)及び(2)の侵害を理由に本件投稿者の発信者情報の開示が認められるのであるから、これ以上同(3)及び(4)の侵害の成否について議論する実益があるのかとの疑問が生じるところであるが、流通情報が異なると、時点が異なり、開示される情報が異なりうることから実益があると考えられる。

たな内容を投稿するのではなく、タイムライン上に表示されるなどして閲覧した第三者のツイートを、自身の投稿と同様にタイムライン上に表示させることで、自身をフォローする利用者（これを「フォロワー」という。）に向けて転送する機能である。

再び図を用いて具体的に示そう。次の《図20》ではさきほど本件投稿者（本件アカウント2）が投稿した本件ツイート2（《図12》）を、別のアカウント（本件アカウント3）がリツイートする様子が示されている。

《図20》本件アカウント3が本件ツイート2をリツイートした<sup>41</sup>（2018年現在の画面）



<sup>41</sup> <<https://twitter.com/RetweetCase3>>.

プロフィール画像を設定していないデフォルト状態の人型画像が表示されている上と下が本件アカウント3自身のツイートであり、その間に本件アカウント2による本件ツイート2が表示されている。そしてその上部には「本件アカウント3さんがリツイート」と記載されている。これがリツイートである。写真の下にリツイートのマーク（二つの矢印が長方形状になっているもの）と「1」が記載されているが、これはこのツイートがリツイートされた回数を示している。

本件アカウント3をフォローしている他の利用者のタイムラインには、これら3つの投稿が時系列順で（リツイートについてはリツイートした時点が基準となる。）表示されることになる。つまり本件ツイート2が転送されたわけである。もしこれを見た本件アカウント3のフォロワーがさらにこのツイートの内容に感激等してリツイートを行うと、さらにそのフォロワーへと情報が拡散されていくことになる。このようにリツイートはTwitterにおける情報流通・拡散のための重要な機能となっている。

リツイートのやり方は単純で、《図11》又は《図12》に表示されている本件ツイート2には写真の下にリツイートのマークが表示されているが、これを押すだけである。これにより、本件アカウント3のフォロワーのタイムラインには、本件アカウント2が投稿した本件ツイート2が表示されることになる。

ここで注目すべきなのは、《図11》又は《図12》に表示されているもともとの本件ツイート2におけるトリミング表示と、《図20》に表示されているリツイート後のトリミング表示とが全く同一である点である。それは当然で、リツイートは元のツイートに何ら手を加えることなくそれをそのまま転送する機能なのであるから、リツイート者による内容の改変は許されていない。もし仮に同じ写真を添付しながら異なる文章でツイートしたければ、一度、本件ツイートに含まれる写真をダウンロードし、改めて自身のツイートとし

てそれらを添付し、独自の文章を記載して投稿する必要がある。これはリツイートとは異なるものである<sup>42</sup>。

さきほど本件ツイート2を投稿する際に本件投稿者にはトリミングの有無やその表示範囲を設定する権限がないと述べたが、リツイートの場合も全く同様であり、リツイート者にもそのような権限はない。元のツイートがあるがままで転送する機能なのである。したがって、そこではさきほど見たのと同じHTML及びCSSによって同じトリミング表示（マスキング、クロップ）が行われている。画面表示の際にインラインリンクにより呼び出されている画像ファイルも本件投稿者がアップロードしたURL（流通情報2(2)）そのままであり、リツイートに際して再度別の保存領域に保存され直すということはない。すなわちリツイート行為は画像ファイルの物理的な複製行為を含んでいない。

### （7）事案の概要その3（本件アカウント3ないし5関係）

上記のようなリツイートの説明を前提に、本件リツイート者らに関する事案の概要に話を進めよう。

本件アカウント3、4及び5の各保有者（氏名不詳者。以下この者らを「本件リツイート者ら」と呼ぶ。）は、2014年12月14日頃、本件ツイート2をリツイートした（本件リツイート行為）。これにより、各アカウントのタイムラインに本件写真が表示されることとなった（流通情報3、4及び5）。ここでは《図20》のように本件写真がトリミング表示されている。

---

<sup>42</sup> 他人が投稿した内容を（リツイートではなく）自己の名義で再投稿する行為は「バクツイ」と呼ばれる。＜<https://japan.cnet.com/article/35066735/>>（CNET Japan、2015年7月4日）参照。

行為者	行為	本稿における対応する図
本件アカウント3～5 (本件リツイート者ら)	本件リツイート行為 ＝本件ツイート2をリツイート	図20（＝流通情報3～5）

Xは流通情報3～5によってXの著作権（複製権、公衆送信権、公衆伝達権）又は著作者人格権（氏名表示権、同一性保持権、113条6項の名誉声望）が侵害されたことが明らかであると主張して、プロバイダ責任制限法4条1項に基づき、Yらに対し、本件リツイート者らに関する発信者情報の開示を請求した。

## （８）争点及び原判決

本件の争点は、流通情報1(6)及び(7)、2(3)及び(4)並びに3～5によってXの著作権又は著作者人格権が侵害されたことが明らかと言えるかどうか（プロバイダ責任制限法4条1項1号）である。

原判決はこれらはいずれもインラインリンクであることから、まず流通情報3～5について検討を行った。そこではインラインリンクの設定は著作物自体の送信行為ではないという通説的理解に従い、公衆送信権の侵害が否定された。また複製権、同一性保持権、氏名表示権については「このようなリツイートの仕組み上、本件リツイート行為により本件写真の画像ファイルの複製は行われないから複製権侵害は成立せず、画像ファイルの改変も行われないから同一性保持権侵害は成立しないし、本件リツイート者らから公衆への本件写真の提供又は提示があるとはいえないから氏名表示権侵害も成立しない。」として、いずれも侵害が否定された。公衆伝達権及び113条6項についても同様に非侵害とされた結果、流通情報3～5はいずれも原告の著作権又は著作者人格権を侵害するものではないとして、本件リツイート者らに関する発信者情報開示請求は棄却された。流通情報1(6)及び(7)並びに2(3)及び(4)についても、「以上に説示したところによれば」侵害に当たらないと

された。

結局、当事者間において公衆送信権侵害であることについて争いが無い流通情報 1 (1)～(5)と 2 (1)及び(2)のみを根拠として、本件プロフィール画像設定者と本件投稿者の発信者情報としてのメールアドレスの開示の限度で請求が一部認容された。

そこで X が控訴したのが本件である。控訴審においては開示を請求する発信者情報目録の記載内容が変更されており、これが訴えの一部取下げ及び訴えの変更と取り扱われているが、争点は原審と同じである。

控訴審において X は、「侵害情報」として、本件写真の画像データのみ（予備的主張）にとどまらず、「ブラウザ用レンダリングデータ及びこれを構成する要素となる、ファイルに保存された HTML データや CSS データや JavaScript データ」を取り上げている（主位的主張）。

### 3 判旨

原判決を変更し、本件リツイート者らに関する部分についてもメールアドレスの開示請求を認容した。

#### （1）事実関係等

「本件リツイート行為により本件アカウント 3～5 のタイムラインの URL にリンク先である流通情報 2 (2) の URL へのインラインリンクが設定されて、同 URL に係るサーバーから直接ユーザーのパソコン等の端末に画像ファイルのデータが送信され、ユーザーのパソコン等に本件写真の画像が表示されるものである。もっとも、証拠及び弁論の全趣旨によると、ユーザーのパソコン等の端末に、本件写真の画像を表示させるためには、どのような大きさや配置で、いかなるリンク先からの写真を表示させるか等を指定するためのプログラム（HTML プログラム、CSS プログラム、JavaScript プロ

グラム）が送信される必要があること、本件リツイート行為の結果として、そのようなプログラムが、リンク元のウェブページに対応するサーバーからユーザーのパソコン等に送信されること、そのことにより、リンク先の画像とは縦横の大きさが異なった画像や一部がトリミングされた画像が表示されることがあること、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像は、流通情報2(2)の画像とは異なるものであること（縦横の大きさが異なるし、トリミングされており、Xの氏名も表示されていない）が認められる。そして、Xは、本件写真の画像データのみならず、これらのHTML プログラム、CSS プログラム、JavaScript プログラムのデータ等が結合して生成される『ブラウザ用レンダリングデータ』あるいはHTML データ等を『侵害情報』と主張するものである。」

## （２）同一性保持権侵害について（本件リツイート者ら関係）

「前記(1)のとおり、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像は、流通情報2(2)の画像とは異なるものである。この表示されている画像は、表示するに際して、本件リツイート行為の結果として送信されたHTML プログラムやCSS プログラム等により、位置や大きさなどが指定されたために、上記のとおり画像が異なっているものであり、流通情報2(2)の画像データ自体に改変が加えられているものではない。

しかし、表示される画像は、思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものとして、著作権法2条1項1号にいう著作物ということができるところ、上記のとおり、表示するに際して、HTML プログラムやCSS プログラム等により、位置や大きさなどを指定されたために、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像は流通目録3～5のような画像となったものと認められるから、本件リツイート者らによって改変されたもので、同一性保持権が侵害されて



いるということができる。

この点について、Yらは、仮に改変されたとしても、その改変の主体は、インターネットユーザーであると主張するが、上記のとおり、本件リツイート行為の結果として送信されたHTML プログラムやCSS プログラム等により位置や大きさなどが指定されたために、改変されたということができるから、改変の主体は本件リツイート者らであると評価することができるのであって、インターネットユーザーを改変の主体と評価することはできない(著作権法47条の8は、電子計算機における著作物の利用に伴う複製に関する規定であって、同規定によってこの判断が左右されることはない。)。また、Yらは、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像は、流通情報2(1)の画像と同じ画像であるから、改変を行ったのは、本件アカウント2の保有者であると主張するが、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像は、Xの著作物である本件写真と比較して改変されたものであって、上記のとおり本件リツイート者らによって改変されたと評価することができるから、本件リツイート者らによって同一性保持権が侵害されたということができる。さらに、Yらは、著作権法20条4項<sup>〔ママ〕</sup>の『やむを得ない』改変に当たると主張するが、本件リツイート行為は、本件アカウント2においてXに無断で本件写真の画像ファイルを含むツイートが行われたもののリツイート行為であるから、そのような行為に伴う改変が『やむを得ない』改変に当たると認めることはできない。」

### （３）氏名表示権侵害について（本件リツイート者ら関係）

「本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されている画像には、Xの氏名は表示されていない。そして、前記(1)のとおり、表示するに際してHTML プログラムやCSS プログラム等により、位置や大きさなどが指定されたために、本件アカウント3～5のタイムラインにおいて表示されてい

る画像は流通目録3～5のような画像となり、Xの氏名が表示されなくなったものと認められるから、Xは、本件リツイート者らによって、本件リツイート行為により、著作物の公衆への提供又は提示に際し、著作者名を表示する権利を侵害されたといえることができる。」

#### （４）本件リツイート者らが「発信者」であることについて

「本件リツイート行為は、Xの著作者人格権を侵害する行為であるところ、前記…認定の侵害態様に照らすと、この場合には、本件写真の画像データのみならず、HTML プログラムやCSS プログラム等のデータを含めて、プロバイダ責任制限法上の『侵害情報』といえることができ、本件リツイート行為は、その侵害情報の流通によってXの権利を侵害したことが明らかである。そして、この場合の『発信者』は、本件リツイート者らであるといえることができる。」

#### （５）流通情報1(6)及び(7)並びに2(3)及び(4)について

「本件アカウント2の流通情報2(3)及び(4)については、流通情報3～5と同様に、流通情報2(2)の画像が改変され、Xの氏名が表示されていないといえることから、著作者人格権の侵害があるといえることができる。しかし、本件アカウント1の流通情報1(6)及び(7)については、流通情報1(3)の画像と同じものが表示されているから、著作者人格権の侵害があると認めることはできない。これらについて著作権の侵害を認めることができないことは、流通情報3～5と同様である。」

## 4 研究

### （１）本判決の意義と問題点

本判決は、リツイート行為の結果としてHTML及びCSSの機能によって

行われる装飾によって、本件写真の縦横の大きさが異なり、トリミングされた状態でブラウザ画面上に表示され、その際に、もともと付されていたXの氏名が表示されなくなったことについて、リツイート者による著作権（同一性保持権及び氏名表示権）侵害を肯定し、発信者情報の開示請求を認容したものである。

従来、インターネット上での画像等の改変について同一性保持権侵害が問題となったのは、アップロード前に利用者が手で改変を行ったうえ、当該改変状態の画像ファイルをアップロードした事案についてであった<sup>43</sup>。これに対し本件では、サーバにアップロードされた画像ファイル（流通情報2(2)）は本件写真の画像そのものであり、予め改変された状態でアップロードされたわけではない。そうではなく、当該画像ファイルをインラインリンク（埋め込み表示）によってブラウザ画面上に描画する際に、HTML 及び CSS の働きによってトリミングされた状態で表示される点が問題となっている。このような表示上の改変について同一性保持権侵害を認めた点に本判決の意義がある。

また、その改変の主体を、ブラウザに表示させるインターネットユーザではなく、またサービス提供者であるYらでもなく、リツイートを行った者であるとした点も重要であり、本判決に寄せられるであろう批判もこの点に集中することとなるものと思われる（前注6参照）。

冒頭に述べたように、筆者はこの判決の帰結を不当なものであると考えているが、しかしそれにもかかわらず、裁判所がこのような判断に至ったこともやむを得なかったと考えている。それは、裁判所が前提とした事実関係が、Twitter の実際のサービス内容を的確に反映したものではなかったように見えるからである。

---

<sup>43</sup> 大阪地判平成27年9月10日判時2320号124頁〔フラネこ〕、東京地判平成29年6月2日裁判所HP（平成29年（ワ）第9325号）〔ホストラブ〕等。

Twitter の実際の仕組みは本稿の前半部分で相当の紙幅を割いて詳細に紹介した通りのものであるが、裁判所が認定した仕組みはこれとは重要な点で異なっている。具体的には、次の諸点が裁判所の事実認定に反映されていない。

- ① トリミング画像はあくまでもサムネイル表示であり、それをクリックするとオリジナル画像が表示されること（《図13》）
- ② オリジナル画像を表示させるこの機能は、初心者用の解説書に記載されるなどして一般の Twitter 利用者にとってよく知られたものであったこと（《図17》）
- ③ それゆえ、トリミング表示をオリジナル画像そのものと誤認識する利用者は少ないと考えられること
- ④ 画像のトリミング表示をする必要性に関するより詳細な事情
- ⑤ HTML や CSS の内容（トリミングの具体的な表示態様）は Twitter 社の内部システムによって機械的に決定されたものであり、利用者の主体的な設定ではないこと
- ⑥ トリミング表示について2015年に、プロフィール画像について2017年にそれぞれ Twitter の仕様変更があり、それに伴って遡及的に表示内容が変更されたこと
- ⑦ Twitter のサーバから送信される HTML や CSS の内容は静的なものではなく、アクセスの度に Twitter の内部システムによって動的に作成されるものであること<sup>44</sup>

---

<sup>44</sup> あらかじめ用意された固定内容の HTML ファイルが送信されるのではなく、データベースに保存されたツイート内容等を読み込んだうえで、サーバにアクセスしたインターネットユーザの利用環境に応じてシステム内部で最適化された HTML 形式のデータがその場で作成されて送信される仕組みではないかと推測される。ちょうど Google が各検索ワードごとにあらかじめ固定内容の HTML ファイルを準備するのではなく、検索リクエストのたびにデータベー

- ⑧ Twitter はウェブブラウザのみから閲覧するサービスではなく、Twitter 社が公開している API を利用したサードパーティー製クライアントアプリからもアクセスできること<sup>45</sup>
- ⑨ API によって提供されるデータには HTML や CSS の装飾内容は含まれておらず、取得したデータをどのように装飾して表示するかはクライアントアプリごとに様々であること

これらの事実は、それぞれ次のような法的意味を持っている。①②③は「改変」（著作権法20条1項）<sup>46</sup>の、④は20条2項4号<sup>47</sup>の、⑤⑥⑦⑧⑨は「発行者」（プロバイダ責任制限法2条4号）の判断に、それぞれ影響を与え得る。そのため、仮にこれらの事実の一部でも口頭弁論に顕出されていたならば、本判決の結論は異なるものとなった可能性がある。

しかしながら裁判所は当事者が主張していない事実を認定して裁判の基礎とすることが許されないから（弁論主義）、当事者が上記の諸事実を主張せず、またそれを前提とする法的主張をしていない以上、本判決のような結論になるのはやむを得なかったと思われるのである。

---

スに基づいて検索結果の HTML データを動的に作成して返すのと同じ仕組みである。

<sup>45</sup> TwitPane、Tweecha、TweetDeck、Janetter、ツイッターするやつ、twicca など多様なアプリが製作・公開されている。これらのアプリでは画像のトリミング表示は行われていない（API で取得できるデータにはトリミング位置指定の情報が含まれていないので、トリミングを実装できないという事情がある）。また、判決文には現れていないが、準備書面等によれば本件アカウント1はAndroid用の公式アプリを、本件アカウント2、4及び5はiPad用の公式アプリを利用していたようである。

<sup>46</sup> 金子敏哉「同一性保持権侵害の要件としての『著作物の改変』」中山信弘・金子敏哉編『しなやかな著作権制度に向けて』（信山社、2017年）375頁参照。

<sup>47</sup> 上野達弘「著作物の改変と著作権者人格権をめぐる一考察」民商法雑誌120巻4＝5号748頁、6号925頁（1999年）、東京高判平成10年7月13日知裁集30巻3号427頁〔スウィートホーム控訴審〕及び東京地判平成28年2月16日判時2346号116頁〔ザ・グッド・ライフ ジャズ・スタンダーズ・フロム・ニューヨークー審〕（音楽を圧縮して配信したことについて、やむを得ない改変（90条の3第2項）であると判断）参照。

これらの事実を主張すべきであったのは、主張責任を負っており、また実際に Twitter を運営してその仕組みを熟知している Y らである。なぜ Y らがこれらの事実を主張しなかったのかを推測するに、上記事情はいずれも改変についての Y らの主体性を基礎づける方向に働きうるものが指摘できる。もし仮に Y らがこれらの事実を主張していれば、本件リツイート者らの「発信者」該当性が否定され、却って、Y らの「発信者」該当性が肯定されることになるかねない。これはプロバイダ責任制限法 3 条 1 項ただし書きに該当し、Y らが権利侵害についての賠償責任を負うことを意味する。Y らとしてはこの帰結を避ける必要があると考えたのであろう。このような判断自体は訴訟当事者の合理的な行動であって責めるべきではない（期待可能性がない）のかもしれないが、発信者の立場からは手続保障の点で不満に感じるところであらう。この点は本稿の最後に再度触れる。

さて、判例評釈という本稿の性質上、裁判所が前提としていない事実関係をこれ以上述べることは避け、以下ではいくつかの内在的な検討を加えることとする。

## （２）表示上の改変について同一性保持権侵害を肯定した点について

裁判所が認定した通り、「本件アカウント 3～5 のタイムラインにおいて表示されている画像は……表示するに際して、本件リツイート行為の結果として送信された HTML プログラムや CSS プログラム等により、位置や大きさなどが指定されたために、上記のとおり画像が異なっているものであり、流通情報 2 (2) の画像データ自体に改変が加えられているものではない」。元データに不可逆的な改変が加えられたのではない事案において、表示上の（可逆的な）トリミングを著作物の「改変」（20 条 1 項）と評価すべきかという点が問題となる。

著作物の無形的利用全般について同様の問題が生じうる。音楽を公に演奏

する際に演奏ミスをした場合、映画を公に上映する際に映写幕の状態が不良であるために著作者が意図した映像とは異なる映像として提示された場合、絵画を額装して公に展示する際に額縁部分が広すぎて絵画の一部が隠された状態で提示された場合<sup>48</sup>などを想定しうる。これらの場合に、確かにどこにも改変された有形的な媒体は存在していないが、そのことを理由に著作物の「改変」を否定すべきではないだろう<sup>49</sup>。著作者が生み出した創作的な表現がその同一性を保った状態で受領・享受されることを保障した権利が同一性保持権だと考えられるからである。もし仮に表示上の改変は著作物の「改変」に当たらないとすると、CSS の設定によってかなり自由自在な表示上の改変が行えてしまうこと<sup>50</sup>に対して権利が及ばないという耐え難い結果となる。したがって、表示上の改変を著作物の「改変」と捉える本判決の理解は妥当なものである。

### （３）リツイートに固有の問題はあったのか？

流通情報 3～5 と同様、流通情報 2 (3) 及び (4) についても著作者人格権侵害が認められている。裁判所の判断はこの順番で書かれているが、現実の時刻系列はむしろ逆であり、先に本件投稿者によるツイートのタイムラインへの表示が行われ、その後にリツイートによる本件リツイート者らのタイムラインへの表示が行われている。そしてそのどちらも著作者人格権の侵害とされた。結局、リツイートかどうかは侵害の判断には影響をしていない。第一次的なツイートであれ、その後のリツイートであれ、どちらもタイムラインに

<sup>48</sup> 島並教授の問題提起。〈<https://twitter.com/shimanamiryo/status/1006864663697592320>〉。

<sup>49</sup> 最判平成13年2月13日民集55巻1号87頁〔ときめきメモリアル上告審〕もメモリーカードの使用による無形的改変を認めている。

<sup>50</sup> 《図8》はあくまでも一例であり、ほかにも画像の回転、色の変更、ぼかし、明るさやコントラストの調整など、画像編集ソフトを利用して編集するのと同じ効果を CSS だけで実現可能である。リア・ヴェルナー『CSS シークレット』（オライリー・ジャパン、2016年）参照。

においてサムネイル表示されることが侵害だとされたからである。その意味で、本件はリツイートに固有の問題が扱われた事案ではない。

あえてリツイートに固有の議論を採ずとするならば、Yらが主張するように、リツイートは元ツイートをそのまま転送するものであるから、(元ツイートとの関係で) 改変がない、という点であろう。しかし裁判所が適切に述べるように、改変の有無は元の著作物との関係で判断すべきであるから、この議論は成り立たない。また、他人が改変したものをそのまま放送等する場合に、当該二次利用行為が同一性保持権の侵害となるかという論点があるが<sup>51</sup>、本件では本件リツイート者ら自身のリツイート行為が改変行為であると判断されており、他人の改変結果を二次利用したに過ぎない者ではないから、この論点とは問題状況が異なることに注意する必要がある。

#### (4) 「侵害情報の発信者」該当性について

本件リツイート者らの行為が同一性保持権の侵害に当たるとしても、そのことから直ちにプロバイダ責任制限法4条1項の「発信者」に該当するわけではない。すなわち同法2条4号によれば「発信者」とは「特定電気通信役務提供者の用いる特定電気通信設備の記録媒体（当該記録媒体に記録された情報が不特定の者に送信されるものに限る。）に情報を記録し、又は当該特定電気通信設備の送信装置（当該送信装置に入力された情報が不特定の者に送信されるものに限る。）に情報を入力した者」と定義されている（傍点は引用者）。同号ではこの「情報」についての限定はないが、4条1項柱書カッコ書きでは「侵害情報の発信者」のみが発信者情報の開示の対象となるとされているのであるから、結局、侵害情報を記録・入力した者が開示対象の「発信者」となる。

---

<sup>51</sup> 作花文雄『詳解著作権法〔第5版〕』（ぎょうせい、2018年）231頁。



そこで、本件リツイート者らが Twitter のサーバに記録した「情報」が果たして「侵害情報」であるのかを検討しなければならない。この点について X は「ブラウザ用レンダリングデータを形成する元となる HTML データ等は、本件リツイート者らによって、本件リツイート行為時にサーバーに保存されている」と主張している（本判決 8 頁）。前述の通り、リツイート行為時にサーバに固定内容の HTML ファイルが保存されることはないと筆者は想像しているが（前注44）、それはともかく、この HTML や CSS の内容を本当に本件リツイート者らが記録したのかどうかの事実認定が結論を左右することは間違いない。ところが本判決は、X 主張の通りの事実を認定するわけでもなく、また誰がどのような情報を記録したのかについて全く認定することなく、本件リツイート者らの「発信者」該当性を肯定している。ここでは「侵害情報の発信者」の当てはめが適切に行われていないと言わざるを得ない。

#### （５）氏名表示権侵害について

原判決は公衆送信権等の著作権侵害がないことを前提に、「本件リツイート者らから公衆への本件写真の提供又は提示があるとはいえないから氏名表示権侵害も成立しない」とした。ここでは19条1項の「その著作物の公衆への提供若しくは提示に際し」という文言が著作権の支分権該当行為（法定利用行為）を指すものと理解されている<sup>52</sup>。これに対し本判決は、原判決と同様に著作権侵害を否定しつつも、「著作物の公衆への提供又は提示に際し、著作者名を表示する権利を侵害された」として氏名表示権の侵害を肯定している。

なるほど、リツイート行為の結果として本件写真が不特定の閲覧者の端末

---

<sup>52</sup> 前注 2・ロケットニュース24事件大阪地裁判決も同旨。

画面上に表示されている以上、それを「公衆への」「提示」と捉えるのは自然な理解かもしれない。とりわけ公衆送信権のようにその法定利用行為が技術的に詳細に規定されている場合に、その範囲と氏名表示権の範囲を一致させなければならない理由はないかもしれない。他方で、展示権が及ばないような複製物の提示行為について氏名表示権侵害が成り立つと解釈されることになれば、一般人の行動の自由に過度の影響が出ることも懸念される。本判決を機にこの点の議論の深化が望まれる。

なお本件ではYらが主張していないので裁判所が言及していないのは当然なのであるが、19条3項の適用を検討する価値はある。特に上記事実①②③が立証された場合には、サムネイル表示には氏名表示を省略することができるとの判断はあり得よう。

#### （６）プロバイダ責任制限法の欠陥について

本判決の帰結の不当性は、筆者の考えでは次のような構造的欠陥によってもたらされたものである。すなわち、侵害と主張されている流通情報について厳密に分析すればプロバイダ自身が「発信者」（または複数の発信者のうちの一人<sup>53</sup>）と判断されうる事案において、プロバイダがその判断を回避するために自己に不利な事実をあえて主張せず、それゆえに利用者が「発信者」と判断されて開示請求が認容されてしまうという構造である。このことを防ぐためには利用者自身が訴訟に参加（許害防止参加になろうか）して訴訟追行を行うことが望ましいわけであるが、匿名での参加ができない以上、現実的ではない。このような問題は立法当初から意識されており、「開示の是非を判断するに当たっては、当該発信者の意思が十分に反映されなければならないのであるが、匿名性を維持したままでの発信者自身の手続参加が認めら

---

<sup>53</sup> 総務省総合通信基盤局消費者行政第二課『改訂増補第2版 プロバイダ責任制限法』（第一法規、2018年）33頁。

れない現行の手続法の枠組みの下にあっては、開示請求の相手方となる……開示関係役務提供者……の行為を通じて、発信者の利益擁護や手続保障を図ることが不可欠である。」<sup>54</sup>「開示関係役務提供者が不熱心な応訴態度を示した場合、そのこと自体により開示関係役務提供者が責任を問われる可能性がある」<sup>55</sup>と述べられているところである。

ただ、著作権・著作者人格権侵害の場合には他の権利侵害の場合と比べて、より先鋭的にこの問題が現れる。それは規範的主体論によって比較的容易にプロバイダ（サービス提供者）が侵害の主体と判断されうるからである<sup>56</sup>。本件はこの問題が顕在化した事案であると考えられ、プロバイダ責任制限法のあり方に一石を投じる事件であると言えよう。

## 5 おわりに

筆者は上記①ないし⑨の事実が重要であると見ており、これらが主張立証されていれば本判決の結論は異なっていただろうと考えている。しかしこれは Y らの応訴態度を不熱心だと非難する趣旨ではない。Y らとしては、詳細に事実関係を主張立証すればするほど自らの侵害主体性が肯定されるのではないかというジレンマの中で、合理的にとりうる最良の訴訟活動を行った

---

<sup>54</sup> 同72頁。

<sup>55</sup> 同80頁。

<sup>56</sup> 本件のサービス内容も見方によっては次のように捉えることができるかもしれない。すなわち、Twitter 社は画像をトリミング表示するための機能を利用者に提供しており、その機能を実現するプログラムやサーバを管理・支配している。利用者が画像をアップロードするだけで、あとは自動的・機械的にトリミング表示がなされる。HTML や CSS による表示態様の指定という画像の改変の実現における枢要な行為は Twitter 社がすべて行っており、Twitter 社による行為（前注37で言及されている AI のような各種プログラムの実行）がなければ、たとえ利用者が画像をアップロードしてもトリミング表示されることはおよそ不可能なのであるから、Twitter 社を改変の規範的主体であると認めることができる（前注4・ロクラクⅡ事件最高裁判決参照）。

<sup>57</sup> Twitter 社に対する発信者情報開示請求訴訟においてログインの際の IP アドレスの開示

ものであると捉えている。したがって、裁判所の判断もこれはこれでやむを得ないものであり、むしろ、最新ログイン時の IP アドレスの開示を否定し<sup>57</sup>、（権利行使の実効性に疑問のある）メールアドレスの開示にとどめた点は裁判所なりの妥当な落としどころを探った結果ではないかと推測している。

このような意味で本判決について判例評釈として批評することにはかなりの困難を伴ったが、裁判所の事実認定を前提としても成り立ちうる批評に留めるよう努めたつもりである。その結果、著作権法上もいくつかの興味深い論点を提起する判決であることが明らかとなった。他方、この事件が提起しながら本稿では触れることができなかった課題がいくつもある。そのうち最も重要なものは、送信行為に着目する現行著作権法の限界である。

現行著作権法は、一つの固定内容のファイルに著作物が記録され、そのファイルがそのまま流通し、そのまま表示されるという静的なウェブを想定して条文を組み立てているように見える。しかし現在のウェブの主流は、動的な（インタラクティブな）ウェブである。そこでは被疑侵害者が何を送信したかよりもむしろ、結果的に利用者が何を受信してどのように享受したかに着目することが重要性を増しているように思われるのである（本件で X が主張したブラウザ用レンダリングデータという概念もこの点を意識したものであろう。）。従来、送信と受信は表裏一体のものと考えられてきた節があるが、実はそうではないのではないかと。欧州司法裁判所が公衆への伝達権における伝達概念を極めて広く解釈し、またアメリカの裁判所がサーバテストを放棄して埋め込み表示について展示権侵害を認めたのは<sup>58</sup>、このような状況の変化に対応した必然の結果だったのではないかと。疑問が尽きることはないが、これらの点の検討は他日を期すこととしたい。

---

を認めた先例として、東京高判平成26年5月28日判時2233号113頁がある。

<sup>58</sup> さしあたり谷川・前掲注5・216頁注26を参照。